

Title	明治時代, 山形県庄内地方の最初の写真館と当時の映像をめぐって : 鶴岡市・酒田市を中心に
Sub Title	Early photography studios in the Meiji era : images from Tsuruoka and Sakata in the Shonai region, Yamagata prefecture
Author	ガボリオ, マリ (Gaboriaud, Marie)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.48 (2016. ) ,p.1- 31
JaLC DOI	
Abstract	<p>This article aims to trace the history of the first photography studios, at the end of the 19th century, in two towns of the Shonai region, in the Yamagata prefecture of Japan – the castle town of Tsuruoka, and the port town of Sakata.</p> <p>The first local photographers are, for the most part, anonymous, but they played a very important role in the dissemination of photography. Images of theirs enable us to explore this region of north-east Japan more than a century ago, showing its urban landscape, its modernization, the disaster of the Shonai earthquake of 1894, and its people – those who attended the studios and posed for photographs.</p> <p>Together, the photographers and their subjects contributed to the creation of this valuable documentary record of their time.</p>
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20161231-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20161231-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 明治時代，山形県庄内地方の 最初の写真館と当時の映像をめぐって

——鶴岡市・酒田市を中心に——

ガボリオ マリ

1839年フランスで生まれた写真術は、世界中の人を魅了した19世紀の大発明の一つである。日本に写真術が伝わったのはやや遅れて幕末、遅ればせながら西洋諸国に倣って近代化を目指し始めた時期でもあった。1860年代、長崎や横浜のような港町や大都市ではアメリカ人、ヨーロッパ人、そして日本人が初めての写真館を開業し、それに伴って新しい職業が誕生した。技術的進歩と相俟って全国で次々と写真館が開業されると、次第に裕福な人々が自分や家族の人生の節目となる大切な日に写真館を訪れるようになった。

当初は肖像写真が主流であったが、公共の大規模土木工事や新しい建造物のほか、日常の光景、風俗、風景に加えて、歴史的な名所や時代の名士達も被写体として急速に注目されるようになった。さらに写真は様々な学問分野においても、また戦争や地震等の大きな災害や出来事の記録としても活用されるようになった。

本研究<sup>1</sup>では、地方における写真の普及に大きな役割を果たしたと思われる地元の無名の写真師に着目してみた。写真はどのようにして地方社会の中で広まったのか。初めて写真師として活動を始めたのはどのような人達であったのか。彼らがレンズで捉えたものは何か。こうした問いの答えを探るべく、研究地を庄内地方<sup>2</sup>の二都市、山形県の城下町として知られる鶴岡市と、港町の酒田市に絞り、調査を行うことにした。この二つの町を比較し、共通点・相違点それぞれに注目することにより、これらの地域で写真がどのように広まっていったのかをより理解することが出来ると思われる。

まず最初にこの地域に写真術がもたらされた明治時代、これらの町が経験した大きな変化、特に国の近代化の波の中で行われた建築事業や、酒田の町の半分を壊滅状態に陥れた明治27年(1894)の庄内大地震に目を向けることにする。同時に、東北地方で初めてとなる写真館を山形市に開いた菊地新学についても触れることにする。新学が撮影した鶴岡

及び酒田の写真は、明治初期に登場した公共建造物の重厚で豪華な様子を伝えてくれる。

続いて、それぞれの町に初めて登場した写真館の歴史をたどってみる。中には今日(2016年現在)もなお営業を続けている店も存在する。当時活躍した写真師はほとんどが無名であり、すでに全国的に活躍した先駆者世代ではないが、彼らの存在は実に重要であったと言える。彼らが残した貴重な証言である写真のおかげで、明治時代の当地の様子や人々の生活を垣間見ることができるからである。

最後に、当時写真館で撮影された肖像写真等の幾つかを取り上げ、そこに足を運んだ人々を通して当時の社会や生活を部分的に考察したい。

## 1. 明治時代の鶴岡と酒田の様子

江戸幕府が滅び、新しく発足した明治政府により次々と改革が施された日本社会は、根本的な変革を遂げながら西洋諸国に対する遅れを取り戻しつつ近代国家への生まれ変わりを目指した。明治4年(1871)には廃藩置県により藩が廃止され、全国に府県が設置された。現在の山形県には当初は七つの県が置かれたが、同年中に行われた合併により3つの県となった(山形県、置賜県、酒田県)。明治8年(1875)、酒田県が廃止され、鶴岡県となり、翌年明治9年(1876)に他の2つの県と合併して現在の山形県になった。

庄内藩の城下町であった鶴岡は、明治維新により激変の時期を迎えた。鶴ヶ岡城は明治4年(1871)に廃城となり、明治9年(1876)に解体された。その後、旧士族の生活は次第に苦しくなり、空き屋敷が増え、また、北海道<sup>3</sup>等へ渡る人が多くなるなどして、鶴岡の人口のおよそ40%(主に旧士族)が消滅した<sup>4</sup>。商売上良い客層であった多くの士族がいなくなったことは、商工業者に重大な影響を与えた。しかし明治の末頃、様々な産業が発展していく中で、人口も増え始め、商業も多様化し<sup>5</sup>、商工業資本家層が出現、地主も増加していった。

江戸時代に庄内藩に属していた酒田<sup>6</sup>は、日本海とそこに流れ込む最上川という地理的に有利な条件に恵まれた重要な港町であった。そのため、海上や河川による水運が発達し、町は繁栄し、多くの商店、廻船問屋、倉庫、宿等が軒を並べた。中でも、主に米等の商売で大きな利益を上げた卸売業者等は近隣農村の土地を次々と吸収し、その多くが地主へと成長していった。庄内地方は有数の米単作地帯であり、第二次世界大戦まで、日本一とい

明治時代、山形県庄内地方の最初の写真館と当時の映像をめぐって  
われる酒田の本間家を始めとする有力な地主が存在した地域であった。

これら二つの町は、明治初頭における国の近代化の波を受け始めた。

### 1.1 近代化を目指す町

新政府が進めた文明開化のシンボルとして、国内各地に数多くの公的な建築物、学校、大学、病院、工場、銀行、博物館、美術館、さらには橋や新しい道路等が建設された。新時代を迎えたことを強調するかのように、西洋建築の影響を受けた大きな建物が特徴的であった。

山形県においても、長年県令を務めた三島通庸<sup>7</sup>（天保6年～明治21年）（1835-1888）のもとで多くの建設工事がなされたが、とりわけ道路を中心とした土木事業に力が注がれた。当時、東北地方は他の地方に比べて特に商工業化の面で遅れをとっていたため、明治政府の指示により様々な開発が計画された。中でも道路網の整備は大きな町を連結し地域の経済的、政治的発展をはかる上で大変重要であり、優先された。

#### 鶴岡

鶴岡では県令三島通庸の政策のもとで、まず明治9年（1876）に朝暘学校<sup>8</sup>が開校した。木造3階建ての洋風建築で、東北地方で最大規模の学校となった（写真1, p.6）。しかしこの学校は7年後の明治16年（1883）に火災によって焼失している。当時は火災が頻繁に発生した時代であった。

明治14年（1881）には西田川郡役所<sup>9</sup>（写真2, p.6）が新築された。木造2階建ての白い洋風の建築物で、屋根上の時計台からドイツ製の大時計が時を知らせた。明治17年（1884）には鶴岡警察署が建てられ、木造2階建ての洋風建築物であった。上に述べた殆どの建物は、松ヶ岡開墾地の蚕室（明治8年）（1875）や鶴ヶ岡城本丸跡の荘内神社建設（明治10年）（1877）で知られる地元出身の名匠、高橋兼吉<sup>10</sup>の手によるものである。また明治21年（1888）にはドイツ人設計の石造りの大泉橋（眼鏡橋）や、洋風建築の西田川郡会議事堂が完成した。他にも数多くの建造物が建てられた。

明治26年（1893）に発行された『荘内案内記』<sup>11</sup>には町の様子が以下のように描写されている。

そのなかしたさかなまち あらまち いた はし おおいずみばし み めがね いしばし はなは びれい  
 …其中下 肴町より荒町に至る橋を大泉橋といひ、三つ眼鏡の石橋にして甚だ美麗な  
 り。…舊郭内は家屋大に類り、舊觀を失ふもの如し。舊城内は今公園地にして、其  
 ちゅうおうきゅうしょうないはんしゅさかい し れい まつ しゃでん こ しょうないじんじゃ しょう しんき ぞく  
 中央に舊 莊内藩主酒井氏の靈を祭る社殿あり。之れを庄内神社と稱し、新規に屬す  
 と雖も、結構精工にして甚だ壯巖なり。…公園地の東北方距ること數十間にして、  
 いえど けっこうせいこう はなは そうごん こうえん ち とうほくほうへだて すうじっけん  
 朝陽學校<sup>12</sup>と稱へる小學校あり。鶴岡全市の子弟、皆此校に入ると云ふ。結構和風な  
 ちようようがっこう とな しょうがっこう つるかぜんし してい みなこのこう はい い けっこう わふう  
 り。其 東隣に警察署あり。結構洋風にして高く峙ち、甚だ壯巖なり。又其 東隣に西  
 そのひがしどなり けいさつしょ けっこうようふう たか そばだ はなは そうごん またそのひがしどなり にし  
 田川郡役所及 郡會議事堂あり。何れも洋風にして壯觀なり。…

## 酒田

明治12年(1879)に県令三島通庸の政策のもと、洋風三階建ての飽海郡役所(写真3, p.6)が新築され、同年、飽海郡琢成学校<sup>13</sup>(写真4, p.6)が開校した。3階建ての洋風建築で、建物の上には時計台があり、その大時計は遠くからでも認めることができた。しかし新設されてわずか4年後の明治16年(1883)に火災で焼失した。

また明治19年(1886)に洋風2階建ての郡會議事堂が、さらに明治23年(1890)にはドイツ人設計による石造りの新井田橋(眼鏡橋)が登場した。

明治26年(1893)に新井田川沿いに建てられた米倉庫「山居倉庫」は鶴岡の名匠、高橋兼吉の手によるものであった。他にも新しい建築物が次々と出現した。

ところが明治27年(1894)、庄内地方を大地震が襲い、特に酒田の被害は甚大で、後に述べるように町の半分が壊滅状態に陥った。

酒田を襲った大地震の前年、明治26年(1893)に発行された『莊内案内記』<sup>14</sup>には酒田について以下のように記されている。

しがい もっと はん か ほんちようどおり そのまち ぐんやくしよ けいさつしょ ぐんかいぎじどう  
 …市街の最も繁華なるは本町通にして、該町には郡役所・警察署・郡會議事堂あり。  
 みなようふう そうかん またこのまち せいたん たくせいがつこう しょう しょうがっこう とうこうぜんし  
 皆洋風にして壯觀なり。又該町の西端に、琢成學校を稱する小學校あり。當港全市の  
 してわ みなこのこう おい しゅうがく い ゆえにはなはひろ けっこうそうごん またし ほっほう  
 子弟、皆此校に於て修學すると云ふ。故に甚だ廣く結構壯巖なり。…又市の北方に  
 しょうざん さんちゅう ひえじんじゃ しゃでん こうだい もっと そうごん そ すくな  
 小山あり。…山中に日枝神社あり。社殿、廣大にして最も壯巖なり。…夫れより少く  
 せいほう いた ひりやま たたえ しょうざん うみべ きつりつ このち はなは けしき と ゆうかくりくぞく  
 西方に至れば、日和山と稱る小山、海邊に屹立し、此地甚だ景色に富み、遊客陸續と  
 して絶ることなし。蕉翁の句を石に刻するものあり。…

ほかにも、この地域で新設された道路や橋等には最新の技術が用いられ、交通網の改良

は経済的發展に重要な役割を果たした。またそれぞれの町に銀行、時計屋、写真屋、洋服屋、宝石店、メガネ屋、印刷屋、西洋洗濯屋、理容店、靴屋、洋菓子店、パン屋、書店等が出現した<sup>15</sup>。西洋文化の導入により、このような新しい職業も登場し繁盛した一方、ほとんどの商売や手工業については藩政時代とあまり変わりがなかったと思われる。鶴岡では明治 33 年（1900）に電灯が登場し、今後発展を遂げる工業部門に大きな影響をもたらしたが、酒田はやや遅れた（明治 41 年）（1908）。日常生活に目を向けると、衣服の面でもより大きく変化したのが男性の服装である。髪を短く刈り、着心地の良さと高級感から軍人や公務員が真っ先に洋服を取り入れた。女性はいままで通り長い髪を結び和服を着るのが多かった。しかし近隣の農村では、あまり大きな変化は見られなかったと思われる。当時の日本は農業を中心とした社会であり、多くの農民は質素な生活をしていた。

## 1.2 貴重な写真に記録された鶴岡と酒田の姿

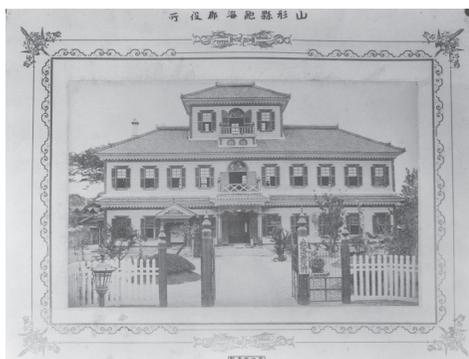
三島通庸<sup>16</sup>は東北地方の近代化のために自分が行った数々の土木事業の業績を、絵画を通じて記録する作業を、初期洋画家の一人高橋由一<sup>17</sup>に、また山形県の土木事業に関する写真記録を山形市の写真師菊地新学に依頼した。当時、写真は現実をありのまま映し出すという点では優れていたが、絵画が表現できた豊富な色彩を欠いていた<sup>18</sup>。そのため菊地新学の写真は、高橋由一が三島通庸の偉業を絵画に仕上げるための下絵の役割を担ったと言われている。

当地方の近代化に関する貴重な資料としての新学の写真は、写真帖に保存されている。2 帖作成されており、一つは明治 14 年（1881）の明治天皇行幸の際に天皇に献上され、もう一つは時の侍従長に贈られたと伝えられている<sup>19</sup>。

以下の写真はその菊地新学の「山形県写真帖<sup>20</sup>」に数枚保存されている鶴岡と酒田の写真の中の 4 枚である。

### 「山形県御用写真師」菊地新学

天保 3 年（1832）、山形若松（現・天童市）に生まれた菊地新学<sup>21</sup>は、江戸滞在中の父親より送られた一枚の写真に感銘を受け、慶応 3 年（1867）、江戸に赴き写真術を学び、翌年（明治元年）（1868）、郷里山形市内七日町に東北地方で初めてとなる写真館を開いた。その後明治 8 年（1875）に再び東京を訪れ、有名な写真師であった横山松三郎（天保 9 年～明治 17 年）（1838-1884）ほかに師事し、最新の技術を磨いた。明治 13 年（1880）には三島通庸から、県令として行った様々な功績を「山形県御用写真師」としてレンズに収め



左から右へ

- 写真 1. 西田川郡朝陽学校，菊地新学撮影，明治 13 年～明治 14 年（1880-1881），山形県立図書館所蔵  
 2. 西田川郡役所，菊地新学撮影，明治 13 年～明治 14 年（1880-1881），山形県立図書館所蔵  
 3. 飽海郡役所，菊地新学撮影，明治 13 年～明治 14 年（1880-1881），山形県立図書館所蔵  
 4. 飽海郡琢成学校，菊地新学撮影，明治 13 年～明治 14 年（1880-1881），山形県立図書館所蔵

るよう依頼された。また新学は多くの弟子を養成し，当地方における写真術の普及という面でも大きな役割を果たした。

山形県に関しては菊地新学が撮影した県令三島の大事業を記録する写真の他，同時期，明治天皇が近代化する国を自らの目で見廻る事を目的に，明治 5 年（1872）から同 18 年（1885）にかけ行った六大巡幸の際に撮影された写真<sup>22</sup>も宮内庁宮内公文書館等に所蔵されている。明治時代に入るとともに広がりを見せた写真術により，天皇の巡幸を機会に，地方の様々な行事や，風景，重要な場所等近代化がもたらしたあらゆるものが記録として写真に収められた。またその際，天皇に随行した写真師の他にも地元の写真師が現地の写真を撮影し，天皇に献上した。

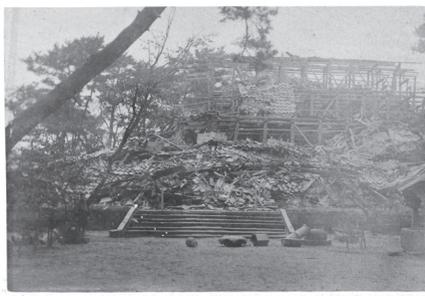
その中に，本研究で取り上げる鶴岡の二人の写真師，加藤正寛と田中隅田<sup>23</sup>の名と松ヶ

明治時代、山形県庄内地方の最初の写真館と当時の映像をめぐって

岡開墾場を中心とした彼らの写真が見られる。また、酒田港<sup>24</sup>の写真も存在する。明治天皇が鶴岡と酒田を訪れたのは、明治14年（1881）の東北・北海道巡幸<sup>25</sup>の際であった。

### 1.3 明治27年（1894）の庄内大震災の記録写真

明治27年10月22日の庄内大地震<sup>26</sup>では717人の犠牲者（3郡の被害統計による）が出た。酒田町では162人、そのうち船場町の犠牲者は70人に達した。地震の発生が夕食の準備の時間帯と重なったため、火災を誘発し、酒田町の半分が焼失した。写真術の発展により、この地域で初めて地震の被害状況が写真に記録された。地震学者大森房吉（明治元年～大正12年）（1868-1923）と、彼が所属する震災予防調査会が調査のために派遣され写真撮影<sup>27</sup>を行った。他にもプロやアマチュアカメラマンが災害の様子をカメラに収めたと考えられる。酒田市立光丘文庫に、この地域に経済的、社会的大打撃を与えたこの地震の凄まじさを証明する写真<sup>28</sup>が収蔵されている。これらの写真の中から2枚を取り上げた（写真5-6）。撮影者を特定できる記載は一切ないが、いずれもプロの写真師か優れたアマチュアカメラマンにより撮影されたものと思われる。当時、酒田にはいくつかの写真館が存在したからである。



左から右へ

写真5. 浄福寺「庄内大震災写真」、撮影者不詳、明治27年（1894）、酒田市立光丘文庫所蔵

6. 出町潰家之図「庄内大震災写真」、撮影者不詳、明治27年（1894）、酒田市立光丘文庫所蔵

## 2. 明治時代の鶴岡市・酒田市の最初の写真館

文明開化により突如として根本的な変化を遂げた当時の日本に、新しく登場した様々な職業の一つが写真業である。しかしまだ写真師になるのは大変困難であり、まず経済的に裕福でなければならなかった。明治中頃まで写真機材はほとんどが輸入品であり非常に高

働で、揃えるためには膨大な投資を余儀なくされたからである。さらに写真は技術面でも非常に難しく、あるレベルの教養はもちろんのこと、化学的知識を十分に習得している必要があった。

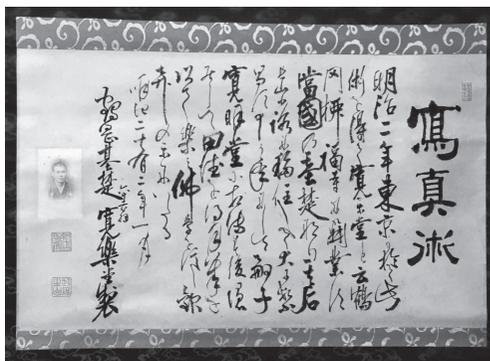
この地域の写真師の中には、初めて東京を訪れた際に新しい技術に魅了され、基礎技術を習得して帰郷した者、すでに写真術を身につけていた父親や他の人々から伝授された者、あるいは働いていた写真館で師匠より教えを受けた者等がいた。写真術習得の修行は決して容易ではなく、一人前となるためには長年の経験が必要とした。

## 2.1 鶴岡市の最初の写真館

文献によると<sup>29</sup>、鶴岡で明治4年(1871)から明治13年(1880)までの間に開業した主な写真館は次の4軒<sup>30</sup>である。その中の2軒は135年以上の歴史があり、現在(2016年)もまだ営業している。さらに2年前(2014年)まではもう一軒存在していたことがわかっている。

### 1. 「寛明堂」(加藤正寛)

「寛明堂<sup>31</sup>」は庄内地方で初めての写真館であり、旧庄内藩士であった加藤正寛が開業した(写真7)。正寛(文政10年~明治35年)(1827-1902)は、戊辰戦争後、謹慎の制裁を受けた庄内藩主・酒井忠篤等と共に上京した。在京中に写真術を習得し、帰郷後、廃藩置県が行われた明治4年(1871)に七日町の柳福寺<sup>32</sup>で写場(写真屋)を開き、日本画家であった自分の雅号「寛楽斎牛山」から「寛楽堂」と名付けた。その後、明治6年(1873)、正寛が46歳の時に与力町長山小路へ移転した(写真8)。写真術を父親より伝授された息子正孝(安政4年~大正7年)(1857-1918)は旧庄内藩士による松ヶ岡開墾場の開拓に従事した後、明治11年(1878)頃写真館を継ぎ、「寛明堂」と改名した。正孝が積極的に新しい写真術の習得に力を注いだこともあり、写真館は大いに繁盛し、地域で評判になった(写真9-10)。正孝には娘しかいなかったため、写真館は婿養子富吉(明治13年~昭和24年)(1880-1949)が継ぎ、「寛園堂」と改名したが、代が変わるたびに屋号を変えるのは望ましくないと、かつて評判の高かった「寛明堂」を再び名乗ることになった。「寛明堂」はその後、大正8年(1919)に完成した鶴岡駅にほど近い荒町(現在の場所)へ大正12年(1923)に移転しており、山形県内では明治元年、山形市に開業した菊地新学<sup>33</sup>の店に次いで歴史があり、現存する中で最古の写真館である。



左から右へ

写真 7. 加藤正寛，撮影者不詳，明治 9 年（1876），寛明堂写真館所蔵

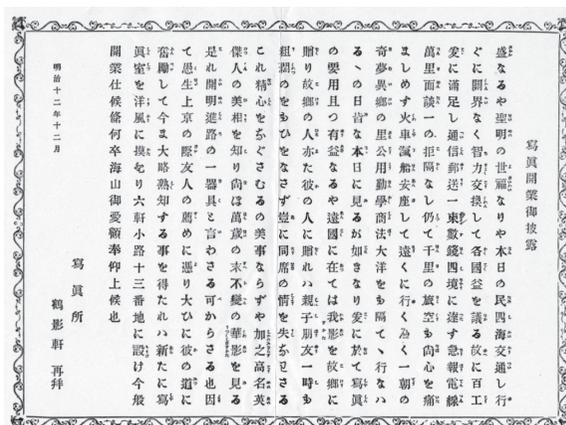
8. 「写真術」，掛け軸，加藤正寛筆，明治 22 年（1889），寛明堂写真館所蔵

9-10. 女性像と台紙の裏面，明治 20 年代後半（1892-1896），鶴岡市郷土資料館所蔵

## 2. 「鶴影軒」（田中隅田）

「鶴影軒」は田中隅田により開業された。『鶴岡市史』<sup>34</sup>によれば，田中隅田は荒町の質屋，斎藤惣兵衛の長男として生まれ，のちに田中某に養育された。東京滞在中に写真に興味を持ち技術を習得して帰郷後，明治 12 年末（1879），六軒小路に洋風の写真館を開業した（資料 1）。その後，明治 30 年から 38 年の間に下肴町に移転し，眼鏡橋の背景として注目を集めた白い木造の洋風写真館を開いたと思われる（写真 11）。多方面にわたる技術革新が進んだ明治時代において，特に交通機関および通信郵便事業等の発展に伴う写真の将来性を確信した彼は，写真館開業の際，以下の広告を出している（資料 1）。

田中隅田の写真館は，明治，大正時代を通して最も評判となった写真館の一つであり，政治家や実業家，あるいは芸者等が足繁く通ったと言われている。隅田は町の風景・公共の建造物等<sup>35</sup>も多数撮影した（写真 12-13）。



資料1. 「鶴影軒」の開業の際の広告、明治12年（1879）12月、鶴岡市郷土資料館所蔵



左から右へ

写真11. 眼鏡橋、絵葉書、大正2年（1913）8月24日投函、鶴岡市郷土資料館所蔵。橋の側にある白い建物は「鶴影軒」である。

12-13. 馬場町と台紙の裏面、「鶴影軒」、明治20年代？（1887-1896？）、内藤由美様所蔵

14. 「鶴影軒」台紙の裏面、K. Tanaka（田中幸次郎）、明治30年代（1897-1906）、ガボリオ マリ所蔵

15. 「田中写真館」の広告、明治42年（1909）、『鶴岡商工人名録』所収、鶴岡市郷土資料館所蔵

明治30年代、「鶴影軒」で田中幸次郎（K. Tanaka）が撮影した写真がたくさん残っている（写真14）。しかし調査したところでは、大正時代の始め頃から写真に田中幸次郎の名前（K. Tanaka）は見られず、田中隅田（S. Tanaka）または田中（Tanaka）の名前のみが記されている。幸次郎が田中隅田の息子または養子の名前であったか、あるいは隅田の本名であったかは不明である<sup>36</sup>。その後、明治末頃に「鶴影軒」は田中写真館と改名され（写真15）、第二次世界大戦前まで存在したようである。

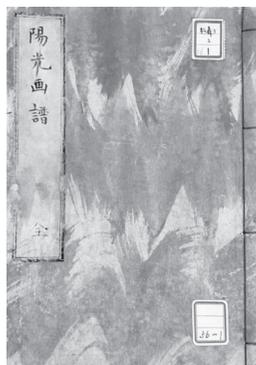
### 3. 「松森写真館」（松森昌三）

松森写真館は庄内藩士であった松森胤保<sup>37</sup>（文政8年—明治25年）（1825-1892）の二男、昌三（?-大正3年）（?-1914）によって明治13年（1880）に宝町に開かれた。胤保は天才的な博物学者としても知られ、幼少の頃からあらゆる科学的な分野に興味を示し、膨大な著書<sup>38</sup>を残している。幕末、松山藩の付家老となり江戸を訪れた際に、好奇心の強い胤保は写真技術にも興味を持ち（写真16）、明治2年（1869）から自分の家族や親戚の写真を撮影し始めており（写真17）、庄内地方では最も早く写真術を習得した一人と思われる。また胤保は明治14年（1881）、息子の昌三に写真術を伝えたいとの思いから『陽光画譜<sup>39</sup>』を執筆した（写真18）。『山形縣莊内實業家傳<sup>40</sup>』によれば、昌三の長男昌胤（明治13年～昭和29年）（1880-1954）は仙台で写真館を開業していた酒田出身の白崎民治の下で修業し、帰郷後は、父昌三と共に松森写真館で働いた。店は明治36年（1903）に下肴町（現在の場所）に移転した（写真19-21）。

### 4. 「育影堂」（鈴木九右衛門）

「育影堂」の創始者で米沢出身の鈴木九右衛門は、明治10年（1877）頃五日町の川端で写場を開いたと伝えられるが、のちに馬場町（公園地）に移った<sup>41</sup>（写真22）。『山形縣莊内實業家傳<sup>42</sup>』によれば、明治17年（1884）に生まれた息子勝吉に写真技術を伝授したが、業界の競争が次第に激しくなり、人々は写真の質と価格に注目するようになっていった。そこで勝吉は自分の技術を高めるため、同じ町の「鶴影軒」（田中隅田、上記参照）で7年間修業し、その後「育影堂」を継いだ。平成26年（2014）まで営業されていた。

当時この他にも営業していた写真館が存在すると思われるが、残念ながら今回の調査ではそれらに関する情報は得られなかった。鶴岡市に関する写真集<sup>43</sup>の中には明治初期の肖像写真、また廃藩置県で廃城となり明治9年（1876）に壊される前の鶴ヶ岡城が写ってい



左から右へ

- 写真 16. 松森胤保の肖像写真 (41 歳), 撮影者不詳 (江戸), 慶応元年 (1865), 松森写真館所蔵  
 17. 少年 (14 歳), 松森胤保, 明治 3 年 (1870), 松森写真館所蔵  
 18. 「陽光画譜」の表紙, (明治 14 年) (1881), 酒田市立光丘文庫所蔵, (山形県指定文化財)  
 19. 松森写真館, 明治末期, 大正初期『目で見える鶴岡百年』(明治・大正編), (1976), p.79  
 20-21. 男の子像と台紙の裏面, 明治 36 年~40 年頃 (1903-1907), ガボリオ マリ所蔵



写真 22. 庭にて家族写真, 明治 30 年, (1897), 鶴岡市郷土資料館所蔵

## 明治時代、山形県庄内地方の最初の写真館と当時の映像をめぐって

る写真も見られる<sup>44</sup>。ただほとんどの写真同様、撮影した写真師の名は記載されていない。明治22年(1889)の営業税に関する資料では、鶴岡町で営業していた写真館の納税者として4名の記録があるが、その中の五日町加藤奎政という人物については情報が無い(注29を参照)。他の一人、会陽堂一馬が撮影した松ヶ岡開拓畑風景の写真が致道博物館に保管されており、また鶴岡市郷土資料館にも一馬の一枚の写真(男性像、ガラス写真)があるが、この写真師についても情報が無い。井桜、ポイド(2000)<sup>45</sup>によれば、木塚忠吾という写真師も明治30年代後期頃営業していたようであるが、やはり詳細は不明である。さらに平井(2013)は当時の山形新聞(明治12年(1879)6月10日版)に、杉村克寛という人物が東京で写真術を学び、鶴岡の横町にあった小西忠次郎宅で写場を開く旨の広告を掲載していた事実を指摘している<sup>46</sup>。

### 2.2 酒田の最初の写真館

鶴岡で明治時代に開業した写真館の2軒が現在も営業しているのに対し、酒田では当時存在した写真館は全てがかなり以前に廃業し、関連資料を見つけるのが非常に困難である。酒田は度重なる災害に見舞われており、なかでも既に触れた明治27年(1894)の庄内地震と昭和51年(1976)の大火による被害は甚大であり、多くの写真が焼失したと思われる。鶴岡同様、当時存在した写真館の数は明確ではないが、そのなかで写真や情報が残されている当時かなり成功していたと思われる数軒を紹介したい。資料によると、酒田で初めて写真館が開かれたのは鶴岡より少々遅れて、明治13年～15年(1880-1882)頃であったようである。ただ資料にはないが、それ以前に開業した写真館が存在した可能性も否めない<sup>47</sup>。

#### 1. 白崎写真館(白崎民治)

白崎民治<sup>48</sup>は、生まれ故郷酒田で最初の写場(写真屋)を開業した一人であると思われる。安政4年(1857)に生まれ、生家は呉服商であったと伝えられている。明治9年(1876)に旧矢島藩士小助川三次から写真術を習得、明治11年(1878)頃上京し、銀座に写真館を開業していた二見朝隈(嘉永5年～明治41年)(1852-1908)に2年間師事したようである<sup>49</sup>。その後故郷に戻り、明治13年～15年(1880-1882)頃に酒田港に写真館を開いたと思われる。明治21年(1888)頃仙台に移転したと言われている。酒田で初めて開業した場所は不明だが、明治15年(1882)には酒田港内匠町<sup>50</sup>に存在したとされる。明治22年(1889)頃の写真台紙の裏面(写真23-24)の情報によれば、酒田町酒田港下

内(町)となっている。2番目の写真の裏面(写真25-26)には、出張所として仙台の写真館の場所(一番丁)が記されているが、その下にはより太い文字で「酒田港」の文字が見える。つまり、この写真が撮られた時期はまだ酒田で写真館を営業していたと思われ、仙台に移り本格的に写真師として活躍する直前であろうと考えられる。才能に恵まれ、その後さらに熱心に写真技術を学んだ民治は、生まれ故郷酒田の佐藤兼吉、鶴岡出身の五十嵐与七(明治18年～昭和42年)(1885-1967)等多くの弟子を育成した<sup>51</sup>。

白崎民治は東京や函館などの多くの有名な写真師<sup>52</sup>とのつながりがあり、また明治23年(1890)の第3回、明治28年(1895)の第4回内国勧業博覧会にも出品している<sup>53</sup>。



左から右へ

写真23-24. 芸者像と台紙の裏面(拡大したもの)、白崎民治(酒田町・酒田港・下内(町))、明治22年頃(1889)、(酒田町となっているので明治22年(1889)の町村制施行直後と思われる)。ガボリオ マリ所蔵  
25-26. 男性像と台紙の裏面、白崎民治(仙台東一番丁、出張所/酒田港)、明治21～22年(1888-1889)頃、ガボリオ マリ所蔵

## 2. 「徳翠軒」(家坂徳三郎)

酒田で最初の営業写真館の一つである「徳翠軒」は、家坂徳三郎<sup>54</sup>により明治18年(1885)頃、出町で創業された。徳三郎(写真27)は、安政7年・万延元年(1860)豪商<sup>55</sup>の長男として生まれたが家業を継がず、酒田港の近く、出町に写真館を開いた。写真術を横浜で学んだ後、山形に写真館を開業していた菊地新学を度々訪ねたようである<sup>56</sup>。徳三郎が最も多く撮影したのは肖像写真であったが、他にもたくさんの風景、特に自宅に近い酒田港、日和山公園、町の風景等も撮影している。当時の町の風景(写真28-29)<sup>57</sup>を一番数多く残してくれた写真師であると思われる。素晴らしい眺望で有名な朝日山(日和山公園)で徳三郎が撮影した写真には、写真機を携える人物の姿が映し出されている(写真30-31)。そのことから当時の写真の普及の様子がうかがわれる。

明治時代、山形県庄内地方の 最初の写真館と当時の映像をめぐって



左から右へ

写真 27. 家坂徳三郎の肖像，撮影者不詳，撮影年不詳，内藤由美様所蔵

28-29. 震災前の出町と台紙の裏面，明治 27 年（1894）以前，内藤由美様所蔵

30. 朝日山（日和山公園），明治 30 年～38 年頃（1897-1905），酒田市立資料館所蔵

31. 朝日山（日和山公園）（写真の一部を拡大したもの，写真師の姿），明治 30 年～38 年頃（1897-1905），酒田市立資料館所蔵

### 3. 池田写真館（池田亀太郎）

酒田の洋画の先駆者と言われる池田亀太郎<sup>58</sup>は、浜町で荒物屋を営む商人池田亀蔵の長男として文久 2 年（1862）に生まれた。明治 17 年（1884）に油絵画家の高橋由一が酒田を訪れた際にその作品に触れたためか、亀太郎の作品は由一の画風の影響を大きく受けていると言われる。後に上京して写真技術等を学び、帰郷後の明治 18 年（1885）頃に池田写真館を開いた。写真は当初、肖像画を描く目的のために学んだと言われており、亀太郎は写真師として、同時に洋画家としても活躍した。残念ながら今回、亀太郎が撮影した写真は一枚も入手する事ができなかった。一方で高橋由一の影響からか鮭図を描いたものや、地元名士の肖像画を描いたものが残されている。

#### 4. 「玉影軒」(池田真佐(まさ)、若林安松)

「玉影軒」は、下台町に明治20年代中頃、池田真佐(まさ)によって開業された(写真32-34)。当時、女性写真師は非常に珍しい存在であった。小山松(1972)<sup>59</sup>によれば彼女は進歩的な人で、横浜で写真術を習い、帰郷後写真館を開き、その後、尾関又吉<sup>60</sup>(酒田の廻船問屋、酒田36人衆の一人)の弟得郎と結婚した。現地調査の結果、明治27年(1894)に尾関又吉の弟得郎と結婚したのは池田芳江という女性であった。同一人物であれば「真佐」の本名は「芳江」であるとも考えられる。明治30年(1897)頃、すでに写真師であった若林安松<sup>61</sup>は「玉影軒」に雇われていたが、明治34年(1901)、池田真佐(または池田芳江)の娘(尾関竹代)と結婚することになった<sup>62</sup>。しばらくして、安松<sup>63</sup>は山王下に若林写真館を開業した。高田(1909)によれば<sup>64</sup>、安松は明治9年(1876)富山県に生まれ、父親の若林快雪(天保14年~大正11年)(1843-1922)は有名な書家であった。安松は故郷を出て、東京で有数の写真師である田中松太郎<sup>65</sup>に就き写真術を学んだ。明治28年(1895)戦場の写真を撮影し(日清戦争と思われる)、翌年帰郷、明治30年(1897)酒田の「玉影軒」に招職される(写真35)。



左から右へ

写真32. 「玉影軒」の台紙の裏面、明治30年代(1897-1906)、ガボリオ マリ所蔵

33-34. 家族写真と台紙の裏面、「玉影軒」池田真佐、明治30年代(1897-1906)、小松尚様所蔵

35. 「玉影軒」の台紙の裏面、Y. Wakabayashi(若林安松)、明治末(1905-1911頃)、酒田市立資料館所蔵

#### 5. その他の写真館

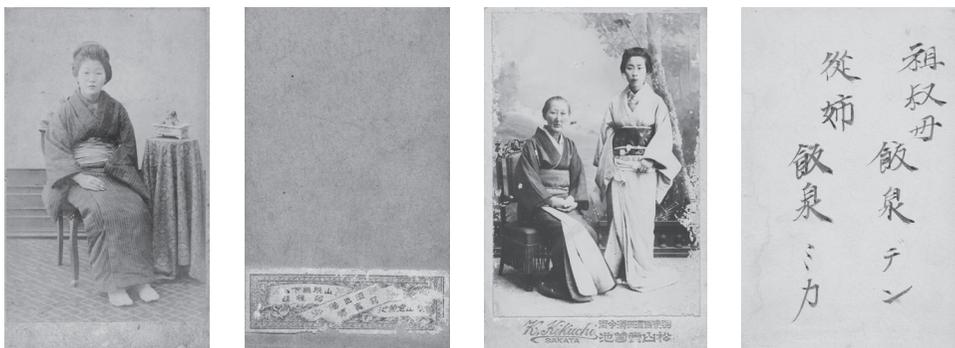
##### 一「松山堂」(菊地)

「松山堂」も酒田で最も古い写真館の一つであると思われる。明治27年(1894)の庄内大地震の際、廃業したようである<sup>66</sup>。菊池某(K. Kikuchi)によって今町で開業された。

現時点でその他の情報は残念ながら収集不可能であるが、この写真館で撮影された次の2

明治時代、山形県庄内地方の最初の写真館と当時の映像をめぐって

枚の写真が写真館の存在を裏付けている<sup>67</sup> (写真 36-39)。



左から右へ

写真 36-37. 女性像, 台紙の裏面, 明治 27 年 (1894) 以前, ガボリオ マリ所蔵

38-39. 家族写真と台紙の裏面, 明治 27 年 (1894) 以前, ガボリオ マリ所蔵

#### 一「長谷川写真館」(長谷川源二郎)

明治 25 年 (1892) に撮影された写真 (写真 40-41) によって, 上台町で「長谷川写真館」が営業されていた事がわかる。創業者, 長谷川源二郎についての情報は残念ながら入手できない。ただ大正 8 年 (1919) 5 月 20 日の酒田新聞の広告によると, 源二郎は大正 3 年～4 年頃下内匠町で写真館を営業したのち上京, 写真術を修業し, 大正 8 年 (1919) 5 月 15 日酒田, 曲師町で再び写真館を開業した<sup>68</sup>。



左から右へ

写真 40-41. 男性像と台紙の裏面, 長谷川源二郎, 明治 25 年 (1892), ガボリオ マリ所蔵

一「美影堂」,「華影軒」

明治30年代<sup>69</sup>, 2つの新しい写真館が開業した。秋田町の「美影堂」(写真42-43)と新町の「華影軒」である(写真44-45)。新町は明治27年(1894)の酒田地震の後, 船場町と今町にあった花街の移転により賑やかになった。



左から右へ

写真42-43. 男性像と台紙の裏面, 「美影堂」, 明治37年(1904), ガボリオ マリ所蔵

44-45. 女性像(芸者)と台紙の裏面, 「華影軒」, 明治30年代, (1897-1906), ガボリオ マリ所蔵

明治末期, 写真術の発展, 専門雑誌等の発行に伴い, 酒田<sup>70</sup>と鶴岡<sup>71</sup>では町の上流階層の間でアマチュア写真が盛んになり, 写真倶楽部が出現したが, 当時まだ写真機材は非常に高価であり, 贅沢な趣味であったため, 参加者は生活に余裕のある人々に限られていた。この時代にはアマチュア写真家も芸術的写真を追求し始めた。

### 3. 明治時代の写真を通じての酒田と鶴岡の人々の肖像

今回調査した写真の中で, 明治初期に撮影されたものはごくわずかであった。前述のように, 明治20年中頃まで写真は湿板写真<sup>72</sup>の手法で撮られており, 技術的にも大掛かりで費用が高んだ為, 写真の値段も高価になり, 肖像写真を依頼したのは限られた人々であった。

以下に取り上げた酒田, 鶴岡の初期の写真師の写真は明治25年(1892)以後撮影されたものである。この頃になると, もう既に写真, 印刷技術等の進歩に伴い, 乾板写真<sup>73</sup>の技法が広く用いられるようになり, 露出時間は短縮され, 操作も単純になった。同時に, 国産の写真機材が出回るようになり, これまでの輸入製品に頼っていた時代と比べ価格を抑えることが出来た。当時撮影された大部分が名刺判肖像写真で, 比較的裕福とされた階

明治時代、山形県庄内地方の最初の写真館と当時の映像をめぐって

層の人々の間で評判となった。他にも様々なサイズの写真が存在する。写真館での肖像写真（家族写真）の撮影は、上流階級の憧れの的の一つとなった。こうして写真は新しい時代の一つのシンボルとなり、繁盛する商売となっていった。

当時、写真の台紙下部もしくは裏面に、撮影した営業写真師の氏名と写真館の場所を明記するのが一般的であったようだが、この地方で電話番号が記されるようになったのは明治41年（1908）以降である。写真の裏面の記載は、時代とともに移り変わる写真館の様子や店名の変更等、写真館の歩みを知る良い手がかりとなる。手書きで撮影日や被写体となった人々の名前や年齢、それぞれの関係等が記されているものもある。写真の台紙の裏面に記されたこの類の走り書きは、そこに写った人物や撮影された時期を知る手がかりとなる。ここでは当時最も流行した名刺判写真の他様々なサイズの写真を掲載した。今回、出来るだけ鶴岡・酒田の写真館の印があるもの、撮影年月日が詳細に、記されているものを資料として収集したが、何の記載もない写真が多く、作業は極めて困難であった。そこで、日付の記載はなくてもおおよそ推察できるものも使用することにした。

調査対象の写真の中に、酒田と鶴岡それぞれの町のある一家族が映し出された写真が何枚もあり、それぞれの家族の貴重な幸福な一時に同席したかのような思いで、感慨深いものがあつた。

### 3.1 明治時代の写真に見る商人の家族

#### —酒田の小野太右衛門家の肖像

幕末から続く酒田の商店小野太右衛門家は、寺町で古い寺の一つである浄福寺の門前通りに面し、竹材や竹製品等を扱っていた。

この家は明治27年（1894）の庄内地震や昭和51年（1976）の酒田大火などの火災を奇跡的に免れてきたので、古い写真等が残されている。以下の写真（写真46-50）は現在の店主の祖父母の家族写真である。祖父、豊次郎は大きな農家の次男として生まれ、小野家の娘、富江と結婚し婚養子としてこの家に入り、その長男（現店主の父）がこの家を継いだ。

#### —鶴岡の小池家の肖像

米沢出身の小池家は明治時代を通して、五日町で恵比寿屋という大きな店を経営していた。元々は江戸時代から続く薬局であったが、二代目小池藤次郎<sup>74</sup>（弘化4年～大正元年）（1847-1912）が多様な商品を扱い、小デパートのようであった。薬の他にも当時流行して



左から右へ

- 写真 46. 洋装の豊次郎, 「長谷川写真館」, 明治 25 年 (1892), 小野太右衛門様所蔵  
 47. 和装の豊次郎, 「玉影軒」(池田真佐), 明治 28 年 (1895), 小野太右衛門様所蔵  
 48. 富江 (後列左) と友人, 「玉影軒」池田真佐, 明治 30 年 (1897), 小野太右衛門様所蔵  
 49. 富江 (左) の家族と妹夫妻, 「若林写真館」, 明治 41 年 (1908), 小野太右衛門様所蔵  
 50. 富江 (前列左), 子供達, 使用人, 「若林写真館」, 明治 42 年 (1909), 小野太右衛門様所蔵

いた帽子, 靴, 服, 傘のような西洋の品, 書籍, 写真用品等も販売していた<sup>75</sup>。

恵比寿屋の繁盛の様子は明治 26 年 (1893) の『莊内案内記』の一節からもうかがう事ができる<sup>76</sup>。

そのほかしょうてん もつと さかん しよせき こまもの やくひんとうほんばい いつかまちえびすやなにがし  
 …其他 商店にて最も盛なるは, 書籍・小間物・薬品等を販賣する五日町恵比寿屋某,  
 やくしゆ こまものてん おい ひといちまちくまもとやなにがし みと てんとう きやくつね じゅうまん ばんとうすうじゅう  
 薬種・小間物店に於て, 一日市町熊本屋某と認む。店頭, 客常に充満し, 番頭數十  
 人趨走, 安座することなし。…

鶴岡市郷土資料館に遺贈された小池家の多くの家族写真の中, 同じ人物の成長を確認できる数枚の写真があった (写真 51-55)。

明治時代、山形県庄内地方の 最初の写真館と当時の映像をめぐって



左から右へ

- 写真 51. とみ江 (13 歳) (前列の右) と友人, 「鶴影軒」, 明治 28 年 (1895), 鶴岡市郷土資料館所蔵  
 52. とみ江 (14 歳), 「鶴影軒」(K. Tanaka), 明治 29 年 (1896), 鶴岡市郷土資料館所蔵  
 53. とみ江の結婚記念写真, 「鶴影軒」(K. Tanaka), 明治 34 年 (1901), 鶴岡市郷土資料館所蔵  
 54. 豊太郎 (4 歳), 「寛明堂」, 明治 36 年 (1903), 鶴岡市郷土資料館所蔵  
 55. 豊太郎 (5 歳), 「鶴影軒」(K. Tanaka), 明治 37 年 (1904), 鶴岡市郷土資料館所蔵

上の写真を見比べると、人物のポーズや、演出が似通っていたり、写真館の様子が同じであることもある。背景に貼られた大きな布には、庭園や滝のある日本や西洋の風景、あるいは当時流行した壁かけ時計や鏡、絵画を配した西洋の屋内の様子等を描いて、被写体を別世界へと誘った(写真 47, 48, 51)。時には足元に実際の枯枝や草むら等を装飾的に配置し、リアリティーや遠近感を演出したりしている。植物や洋書等が小さな机や丸テーブルに置かれていたり、楽器や花束など、撮影された人物の趣味や職業を思わせる品が画面に華を添えていたりする。ヨーロッパ製の絨毯が敷かれており、人々は足を乗せる前に靴を脱いでいる。人物は立ち姿で撮影されたり、椅子に腰掛けていたりする。

撮影される人々はよそ行きで着飾り、堂々としたポーズを取っているが、どの人物の表情にも微笑みはない。上に示した写真の中では、ほとんどの人物が和服で写っている。わ

ずかに少数の子供達と幾人かの男性が洋服を着用しているのがわかる（写真 46-49-54）。婦人や若い娘達は最高級の着物を身につけている。西洋のアクセサリー（帽子、ステッキ、ショール等）が取り入れられていることも注目される（写真 48/-40-42）。

明治 20 年代後半頃から（1892-1896）、多くの家族が家族の行事、お宮参り、七五三、入学式、卒業式、成人式、結婚式等の家族や子供達の大切な節目に写真館を訪れ、幸せの一瞬を写真に収めるようになった。アルバムに収められたこれらの写真は、この様な家族の歴史や社会的階級を物語る貴重な映像となった。

### 3.2 その他の写真

当時の残された写真には、友人同士や職場の仲間等で写ったグループ写真も多く見られる。写真 56 番はおそらくある建設会社の記念撮影と思われる（従業員の上着にそれぞれの身分が示されている）。将来跡取りとなる少年が父親と並んで写っている。次の世代に引き継ぐために資産を守りながら、家と先祖崇拝を継承してくれる跡取りを持つことは当時の社会では大変重要なことであった。

明治時代には戦争（日清戦争、日露戦争）が頻発したため、出征を前に自分の姿を写真に残そうと、若い男性たちが仲間と連れ立って写真館を訪れることもあった。

また技術の発展に伴い、写真師は客の依頼によって客の家や料亭、あるいは温泉などに出向き撮影を行うようになっていた（写真 57）。

その頃、学校での記念撮影も恒例化してきた。池田真佐（玉影軒）が撮影したこの種の写真（写真 58）から、女子生徒の数の少なさが見て取れる。この時代、小学校の義務教



左から右へ

写真 56. 家族系会社の従業員、「玉影軒」（池田真佐）、明治 26 年～ 30 年頃（1893-1897）、ガボリオ マリ所蔵

写真 57. 庭にて家族写真、「松森写真館」、明治 43 年（1910）、ガボリオ マリ所蔵

写真 58. 酒田第一尋常小学校卒業写真、「玉影軒」（池田真佐）、明治 29 年（1896）、ガボリオ マリ所蔵

明治時代，山形県庄内地方の 最初の写真館と当時の映像をめぐって



左から右へ

- 写真 59. 芸者像，「鶴影軒」，明治 15 年～ 20 年代（1882-1896），ガボリオ マリ所蔵  
 60. 芸者像，「鶴影軒」(K. Tanaka)，明治 30 年代（1897-1906），ガボリオ マリ所蔵  
 61. 芸者像，「鶴影軒」(K. Tanaka)，明治 30 年代（1897-1906），ガボリオ マリ所蔵  
 62. 庄内風景（吹浦の羅漢），（絵葉書）明治 35 年～ 40 年頃（1902-1907），ガボリオ マリ所蔵  
 63. 酒田風景（日和山），（絵葉書）明治 35 年～ 40 年頃（1902-1907），ガボリオ マリ所蔵  
 64. 絵葉書の裏面，明治 35 年～ 40 年頃（1902-1907），ガボリオ マリ所蔵

育化はすでに始まっていたが，全ての子供達が学校に通えたわけではなく，特に女子の就学率は低かったようだ。高級官吏の写真は社会的地位の高さを証明するためか，西洋風の服装が一般的であった。

また当時人気があったのは，芸者などの写真であった。写真が普及し始めた当初から，花街の高級娼婦や遊女たちは近くにあった写真館に足繁く通っていた。写真師のモデルを務めることもあった。（写真 59-61）。

写真師，また印刷屋等が店で販売したこの様な女性たちの写真（美人写真）や有名人のプロマイドは大量に普及し，実入りの良い商売となった。焼き増しと見られる数多くの風景写真等も残っており，土産用として販売されていたのではないかと思われる。また写真は新聞，雑誌，旅行ガイドブック等の挿絵として使用されたり，異国情緒を求める外国人向けに多数作成された。

さらに，明治 33 年（1900）に私製絵はがき<sup>77</sup>の使用が許可され，様々な絵はがきが作られるようになった。明治 37 年（1904），日露戦争の際に，日本中で観光地の風景や，美

人写真等の絵はがきが大ブームとなった。以下に見られる庄内風景等の手彩色絵はがき（残念ながらここでは白黒に見えるが）は外国人客向けに作られたものと思われる（写真62-64）。

## 結論

明治時代の初め、写真術は旧藩士松森胤保、加藤正寛らにより城下町鶴岡に導入されたと思われる。松森写真館の開業は明治13年（1880）であるが、創業者の父親である松森胤保は以前より写真術を研究し、当地方の写真師の先駆者的存在の一人であると言える。酒田に写真が伝わったのは鶴岡よりやや遅れてのことであったが、明治10年代末（1877-1886）になるとどちらの町にも写真館が何軒か存在するようになり、写真の普及を知ることができる。また酒田では明治中期頃に一人の女性が写真師として活躍していたが、これはこの時代に非常に珍しいことであった。酒田には当時、鶴岡よりやや多くの写真館が存在したと思われるが代々営業を継承していくことはなかなか困難であったようだ。

本研究の中で用いた写真は、失われたこの地域の光景、当時の限られた社会の一面を教えてくれるだけである。しかしこれらは、日本の激動の時代、この地域に暮らした人々のありのままの様子を視覚的に捉えた初めての映像の一部であり、大変貴重な史料となっている。おかげで今日我々は、一世紀以上前（ある写真は130年以上）のこの地域に、近代化が進む町の様子に、地震災害に、都市景観に、そしてレンズの前でポーズをとる人々に目を向けることが出来る。レンズの前の彼らもまた貴重な歴史資料の一頁である。これから行うほかの調査も、またこの地域の別の顔や、今回取り上げた最初の写真館についての新たな情報を我々に教えてくれるに違いない。

## 注

- 1 本研究のために諸機関と多くの方々にご協力いただきました。鶴岡市郷土資料館、致道博物館、旧風間家住宅「丙申堂」、酒田市立資料館、酒田市立光丘文庫、山形県立図書館、宮内庁宮内公文書館に、厚くお礼を申し上げます。長い間、職員の皆様には大変お世話になり、その上御所蔵の明治時代の貴重な古写真の閲覧、あるいは論文への掲載を許可していただき、大変感謝致しております。また資料の収集に御尽力いただき、色々と御教授下さいました秋保良様、今野章様、酒井忠久様、風間富士子様、佐藤文彦様、後藤藍子様、相原久生様、中山英行様、田村真一様、最上谷直義様、神藤幸子様、誠にありがとうございました。そして御先祖がそれぞれの町で写真術の発展のために大きな役割を果たされた「寛明堂写真館」の加藤典子様、「松森写真館」の松森昌保様、「鈴木写真館」の故鈴木一彦様、大変お世話になり、また御先祖の写真使用を御快諾いただき、厚く御礼

## 明治時代、山形県庄内地方の最初の写真館と当時の映像をめぐって

を申し上げます。また小野太右衛門ご夫妻、小松尚様、家坂美知子様、内藤由美様、若林愛子様にも、御先祖の写真使用をご快諾いただいた上、貴重な時間を割いて家の歴史についてお話いただき、心より感謝致しております。本研究のためにほかにも多くの方々にも大変お世話になりました。「酒田市史編さん室」小松良博様、「鶴岡アートフォーラム」平井鉄寛様、須藤良弘様、杉原丈夫様、原憲子様、田中文子様、萬谷和子様、荒木照夫様、秋野哲平様、佐藤一夫様、梅田彩子様、阿部久書店の皆様、誠にありがとうございました。最後にこの研究を様々な面で支えて下さった私の親友である阿部静子様と津久井雅子様に深い感謝の気持ちを記したいと思います。さらに津久井雅子様にはこの論文の和文作成にあたり大変御協力いただきました。

本研究に紹介した多くの写真は鶏卵紙を使用したセピア色の画像ですが、印刷の影響で残念ながら白黒写真のようになってしまいました。

- 2 これまで日本の農村社会を研究する中、10年前に明治時代の写真を通して見る農村風景に興味を抱き、論文をまとめた(Gaboriaud (2006))。そこで長年研究を続けている庄内地方で、どのように写真が広がっていったのかを調べてみたいと思った。既に平成25年度(2013)には鶴岡市、平成27年度(2015)には酒田市における明治時代の初めての写真館について、フランス語で論文をまとめた(参考文献を参照)。今回さらに現地調査を行い、考察を深めた。
- 3 大瀬編(1973), pp. 24-25。
- 4 大瀬編(1973), p. 105。
- 5 大瀬編(1973), pp. 106-107。当時小さな店が多くあり、特に一番数多かったのは菓子屋であった(大瀬編(1973), p. 117)。
- 6 明治22年(1889)に市制・町村制の施行に伴い、鶴岡町と酒田町が発足した。その後、大正13年(1924)鶴岡は市政施行により、鶴岡市になる。酒田の市政施行は昭和8年(1933)であった。
- 7 三島通庸は天保6年(1835)薩摩藩の武士の長男として生まれる。明治7年(1874)酒田県令に、明治8年(1875)鶴岡県令を経て、合併後明治9年(1876)から同15年(1882)まで初代山形県令として在任した。『新編庄内人名辞典』(1986), p. 604, 那須塩原市那須野が原博物館編集(2014), pp. 54-60を参照。
- 8 大瀬編(1973), p. 140。鶴岡市史編纂会編(2011), p. 146, 『鶴岡市史』(1975), 下巻, p. 3-13を参照。
- 9 鶴岡市史編纂会編(2011), p. 146。
- 10 高橋兼吉(弘化2年~明治27年)(1845-1894), 『新編庄内人名辞典』(1986), pp. 430-431。
- 11 大熊(1893), pp. 25-29, 『鶴岡市史』(1975), 下巻, p. 452。
- 12 『鶴岡市史』(1975), 下巻, p. 12。朝陽学校は明治17年同じ場所に再建されたが、その際は2階建の和風建築であった。
- 13 『酒田市史』(1995), p. 437, 佐藤(1974), p. 59。酒田の琢成学校も災焼前と同じ場所に明治17年2階建て和風建築で再建された。
- 14 大熊堯之(1893), pp. 40-41。
- 15 商業の移り変わりについて『鶴岡市史』(1975), 下巻, pp. 643-760, 大瀬編(1973), pp. 100-136, 酒田に関しては『酒田市史』(1995), 下巻, pp. 318-330を参照。
- 16 三島通庸は自分の土木事業完成を記録するために、文書や写真、絵画を利用した。山形県令を終えてから福島と栃木の県令になったがその際の彼の事業の写真記録は宇都宮の写真師に依頼した。

- 絵画記録は常に高橋由一が担当した。那須塩原市那須野が原博物館編集（2014），pp. 60-62。
- 17 東北地方における高橋由一の旅行について，古田（2012），pp. 146-156，さらに那須塩原市那須野が原博物館編集（2014），pp. 65-158を参照。
  - 18 那須塩原市那須野が原博物館編集（2014），p. 62，また吉田（2012），p. 151。
  - 19 那須塩原市那須野が原博物館編集（2014），p. 39。
  - 20 使用した写真は山形県立図書館の写真であり，徳大寺氏から寄贈されたものである（85枚）。那須塩原市那須野が原博物館編集（2014），p. 39。
  - 21 菊地新学（天保3年～大正4年）（1832-1915），菊地東陽先生伝記編纂会編（1941）『菊地東陽伝』，pp. 49-50，那須塩原市那須野が原博物館編集（2014），p. 61，小沢（1997），pp. 258-267，平井（2013），p. 67を参照。
  - 22 宮内庁書陵部，三の丸尚蔵館編（2015）を参照。
  - 23 宮内庁書陵部，三の丸尚蔵館編（2015），p. 89。
  - 24 酒田の写真は三の丸尚蔵館に所蔵されている。（各地勝景 奥羽・北海道，大蔵省印刷局，明治14年（1881）二冊，三の丸尚蔵館）。宮内庁書陵部，三の丸尚蔵館編（2015），pp. 24-25。
  - 25 宮内庁書陵部，三の丸尚蔵館編（2015），pp. 24-25。
  - 26 『酒田市史』（1995），改訂版，下巻，pp. 359-365を参照。
  - 27 震災予防調査会の撮影による「明治27年10月22日山形県下地震写真帖」が国立科学博物館に所蔵されている。
  - 28 庄内地震の写真が酒田の本間美術館にも収蔵されている。平井（2013），p. 70を参照。また鶴岡市郷土資料館にも庄内地震に関する写真が収蔵されている。写真の台紙に「家坂」と Y.Wakabayashi「玉影軒」の印が押されている。ただし「玉影軒」の写真に関しては店の電話番号が記されているので電話が導入された明治41年以降のもので，写真は焼き増したものと思われる。
  - 29 明治22年（1889）の営業税の資料には，鶴岡町営業写真館の納税者4名の名前が記されている。与力町加藤正寛，五日町加藤奎政，宝町松森昌三，馬場町鈴木九右衛門。田中隅田（鶴影軒）の名は見られない。『鶴岡市史』（1975），下巻，p. 733。明治38年（1905）の『荘内案内記』によれば，八間町の田中鶴影軒，与力町の加藤寛明堂，公園地の鈴木育影軒，下肴町の松森昌三の4軒の写真館が営業されていた。佐藤（1905），p. 75。
  - 30 鶴岡における初めての写真館の歴史に関する資料は数少ない。『鶴岡市史』（1975），下巻，pp. 733-734，平井（2013），pp. 69-70。当時の幾人かの写真師は『山形縣莊内實業家傳』に紹介されている。高田（1909）を参照。本研究は，主として上記資料や家族が受け継いだ古文書等をもとに，さらに現在も子孫が営業を続ける写真館での聞き取り調査，当時の様々な資料や雑誌等も参考にして行われた。当時撮影された多くの写真から情報も得た。鶴岡市の写真集は数多く出版されている（参考文献を参照）。撮影者の名前は殆ど記されていないが大変参考になった。
  - 31 寛明堂写真館の歴史に関しての殆どの情報は加藤家の古文書に基づく。更に高田（1909），p. 106，山形新聞，昭和36年（1961）6月24日（生きていた遺産⑤，加藤正寛）。鶴岡市郷土資料館所蔵。
  - 32 江戸時代に創立された寺院は火災で明治21年（1888）に焼失。
  - 33 正孝は山形市の菊地写真館に出入りがあったようである。平井（2013），p. 69。
  - 34 田中隅田に関する情報は大変限られている。高田（1909），p. 166，『鶴岡市史』（1975），下巻，p. 733を参照。『山形縣莊内實業家傳』によると，大實寺村中道斎藤惣兵衛の子として生まれた。

明治時代、山形県庄内地方の最初の写真館と当時の映像をめぐって

- 高田 (1909), p. 166。
- 35 明治 15 年 (1882) 頃に「鶴影軒」が撮影した西田川郡役所の写真等が鶴岡致道博物館に所蔵されている。
- 36 明治 42 年 (1909) (p. 43), 昭和 6 年 (1931) (p. 67), また昭和 11 年 (1936) (p. 38) の『鶴岡商工人名簿』(鶴岡商工会議所)に田中幸次郎の名が記されている。また『月乃鏡：全国写真師列伝』において田中幸次郎、阪根勝一の名前が羽前写真師として挙げられている。(島岡編 (1998, 復刻版), p. 9)。
- 37 中村 (1947), また Cradle (出羽庄内地域文化情報誌) 2015 年 5 月 5 日, pp. 6-17, 『新編庄内人名辞典』(1986), pp. 598-599 を参照。
- 38 胤保の著書の総数は 700 冊以上を数える。その中で一番有名なのは『両羽博物図譜』(59 冊)である。『新編庄内人名辞典』(1986), p. 599。
- 39 「陽光画譜」に当時の写真術また本人の撮影記録等が詳細に記されている。
- 40 高田 (1909), p. 155。
- 41 『鶴岡市史』(1975), 下巻, p. 734 を参照。明治 22 年 (1889) の営業税の資料では、「鈴木育影堂」は馬場町に記録されている。
- 42 高田 (1909) p. 146。
- 43 鶴岡市の写真集に関して参考文献を参照。
- 44 春日編 (1976), 上巻, p. 11。
- 45 井桜, ボイド (2000)。明治 30 年代後期に発行された写真割引券がある。「特別大勉強」として券持参者は半額とある。P. 114。
- 46 平井 (2013), p. 69。
- 47 酒田における初めての写真館の歴史に関する資料は数少ない。『酒田市史』, (1995), 改訂版, 下巻, p. 330, 酒田市史編さん委員会 (1978), pp. 4-6, p. 29, 平井 (2013), pp. 69-70 を参照。酒田の明治期の写真館の調査については, 鶴岡同様, 主として上記資料や家族が受け継いだ古文書等をもとに, 当時の様々な資料や雑誌等も参考にして行われた。当時撮影された多くの写真を検討しながら, 情報も得た。また酒田市の写真集も大変参考になった。
- 48 横田監修 (1989), p. 8。東京都写真美術館 (2005), p. 218, 島岡編 (1998) (復刻版), pp. 30-31, 平井 (2013), p. 69。
- 49 島岡編 (1998) (復刻版), pp. 30-31。
- 50 平井 (2013), p. 69, 『菊地東陽伝』(1941), pp. 49-50 を参照。
- 51 東京都写真美術館 (2005), p. 218, 横田監修 (1989), (幕末・明治の写真師小辞典), p. 8。
- 52 島岡編 (1998) (復刻版), p. 31。
- 53 横田監修 (1989), (幕末・明治の写真師小辞典), p. 8, 東京都写真美術館 (2005), p. 218。
- 54 酒田市史編さん委員会 (1978), p. 5, p. 29。
- 55 徳三郎は家坂徳兵衛家の長女の長男であったがこの家で育てられた。
- 56 平井 (2013), p. 69 を参照。
- 57 この写真は明治 38 年に発行された『荘内案内記』の巻頭に掲載されている。佐藤 (1905)。
- 58 横田監修 (1989), (幕末・明治の写真師小辞典) p. 1, 東京都写真美術館 (2005), p. 22, 『新編庄内人名辞典』(1986), p. 133。

- 59 小山松 (1972), p. 84。
- 60 『新編庄内人名辞典』(1986), p. 214。
- 61 高田 (1909), p. 201, また「目で見る酒田市史」によれば、安松と「玉影軒」の出会いは明治27年10月22日の庄内大地震にさかのぼるようである。たまたま新潟から来酒していた際、震災状況を撮影する事になり、それを現像する設備を求め、「玉影軒」に頼ったと言われている。酒田市史編さん委員会 (1978), p. 5, また p. 29。
- 62 鶴岡市郷土資料館「尾関家文書」に尾関得郎、若林安松、若林竹江、池田まさの名前が記された手紙が所蔵されている。(その中に写真のための機材や製品の注文もある)。
- 63 若林安松の三男、朝日新聞報道カメラマンの若林邦三が記した本の一冊に著者の住所の記載があり、安松の足跡を辿る事が出来た。この本の出版(1973年)から40年以上が経た今年(2016年)、奇跡的にも邦三の娘の愛子様より手紙にお返事をいただき、いろいろな情報や資料を頂戴した。この方の存在無くして今回の成果を得る事はできなかったと思われる。心から謝意を表したい。
- 64 高田 (1909), p. 201。
- 65 田中松太郎(文久3年～昭和34年)(1863-1959)、富山県出身。東京都写真美術館(2007年), p. 66, 『日本写真界の物功労者頭影録』(昭和27年(1952)の再録)。
- 66 酒田市史編さん委員会 (1978), p. 29。
- 67 平井 (2013), pp. 69-70 を参照。
- 68 『酒田新聞』, 大正8年(1919)5月20日, p. 1。
- 69 明治38年(1905)の『庄内案内記』によると、4つの写真館が存在した。「佐藤美影軒」(秋田町)、「佐藤華影軒」(新町)、「池田宝影軒」(下台町)、「家坂徳翠軒」(出町)。これらの写真館は最も重要な存在であったと思われるが、この他にも存在した可能性がある。佐藤 (1905), p. 11, 大正初期(1912-1925)、写真館の数は増加し、生存競争も激しくなったと思われる。大正4年(1915)の『庄内案内記』にある7つの写真館のうち、これまで既に5つを取り上げた。「若林玉影堂」(下台町)、「佐藤美影軒」(秋田町)、「佐藤華影軒」(新町)、「家坂徳翠軒」(出町)、「長谷川写真館」(上内匠町)。「伊藤写真館」(上台町)と榎本道之助(秋田町)は大正時代の初めに店を構えたと思われる。佐藤 (1915), p. 5。
- 70 『目で見る酒田市史』(1978), p. 5, 明治43年(1910)に酒田写真倶楽部は『写真集』を発行した。(酒田市立光丘文庫に保管されている。)
- 71 『鶴岡市史』(1975), 下巻, p. 734。
- 72 日本写真史に関しては、鳥原 (2013), pp. 3-26, また小沢 (1991), pp. 86-175 を参照。
- 73 日本で初めて乾板写真を撮影したのは浅草奥山の写真師、江崎礼二で、撮影は隅田川で行われた。その後、乾板写真は日本でも広く普及した。鳥原 (2013), p. 22 を参照。
- 74 『目で見る鶴岡百年』(別巻)(1981), p. 116, 『新編庄内人名辞典』(1986), p. 280。
- 75 えびす屋本店の広告, 「酒田新聞」, 明治41年(1908)7月16日, p. 4。
- 76 大熊 (1893) p. 28。
- 77 明治5年(1872)、郵便制度は全国で実施された。明治6年(1873)に郵便はがき(官製)の発行が開始され、明治35年(1902)には初めての官製絵はがきが、また明治37年(1904)には軍事郵便はがきが発行され、大流行となった。明治40年(1907)以前の絵はがきの裏面には通信欄がなく、氏名、住所のみが記載された。酒田では絵はがき等を販売していた店が多数あった。明治

明治時代，山形県庄内地方の最初の写真館と当時の映像をめぐって

39年の酒田新聞の広告によれば，発売元である日の出商店は酒田市内だけで16軒の絵はがき（酒田，庄内風景，酒田美人）販売特約店を持っていた。「酒田新聞」，明治39年（1906）3月2日，p.4。

参考文献

- 秋保良〔ほか執筆〕（1995），『目で見える鶴岡・田川の100年：写真が語る激動のふるさと一世紀』郷土出版社
- Bennett Terry (2006), *Photography in Japan: 1853-1912*, Tokyo: Tuttle Publishing
- Gaboriaud Marie (2006), “Scènes rurales dans la photographie japonaise de l’ère Meiji-A travers un album de Teijirō Takagi” (明治の写真に見る日本の農村風景について), 『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』(42), pp.9-33
- Gaboriaud Marie (2013), “Au temps des premiers ateliers photographiques dans la région de Shōnai, département de Yamagata” (庄内地方におけるはじめての写真館：山形県鶴岡市), 『慶應義塾大学日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』(45), pp.1-30
- Gaboriaud Marie (2015), “La diffusion de la photographie à Sakata durant l’ère Meiji : Département de Yamagata, nord-est du Japon,” (明治時代，山形県酒田市における写真の流布) 『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』(60), pp.129-160
- 日向文吾編（1983），『写真集 明治・大正・昭和 鶴岡』（ふるさとの思い出，266），国書刊行会
- 平井鉄寛（2013），「山形における写真の「ひろがり」—初期写真師と庄内大地震震災写真—」，東京都写真美術館編『夜明けまえ，知られざる日本写真開拓史—北海道・東北編—』研究報告書，東京都写真美術館，pp.67-72
- 伊藤良一〔ほか執筆〕（1995），『目で見える酒田・鮑海の100年：写真が語る激動のふるさと一世紀』郷土出版社
- 井桜直美，トリーニ・ポイド（2000），『セピア色の肖像—幕末明治名刺判写真コレクション—』日本カメラ博物館（監修），朝日ソノラマ
- 春日儀夫編（1976），『目で見える鶴岡百年：付・酒田』（上巻，明治・大正編）エビスヤ書店
- （1981），『目で見える鶴岡百年：付・酒田』（別巻），エビスヤ書店
- 菊地東陽先生伝記編纂会編（1941），『菊地東陽伝』菊地東陽先生伝記編纂会
- 公平直彦（1996），『菊地新学と写真』天童市立旧東村山郡役所資料館
- 宮内庁書陵部，宮内庁三の丸尚蔵館編（2015），『明治天皇邦を知り国を治める：近代の国見と天皇のまなざし』（三の丸尚蔵館展覧会図録，No.67），宮内庁
- クレードル（Cradle）（出羽庄内地域文化情報誌）（2015年5月），「松森胤保の世界」，pp.6-17
- 中村清二（1947），『松森胤保—幕末明治の隠れたる科学者』自文社
- 那須塩原市那須野が原博物館編（2014），『近代を写実せよ：三島通庸と高橋由一の挑戦：開館10周年記念』那須塩原市那須野が原博物館
- 日本写真家協会編（1971），『日本写真史：1840-1945』平凡社
- 日本写真文化協会（1989），『写真館のあゆみ—日本営業写真史—』日本写真文化協会
- 大熊堯之（1893），『庄内案内記』稲生村（山形県西田川郡）：大熊堯之（明治26年）
- 大瀬欽哉（1973），『鶴岡百年のあゆみ：続・城下町鶴岡』鶴岡郷土史同好会
- 小山松勝一郎（1972），『尾関又兵衛考』，『方寸』第四号，酒田古文書同好会，pp.78-84

- 小沢健志 (1997), 『幕末・明治の写真』 筑摩書房 (ちくま学芸文庫)
- 『酒田新聞』 明治 39 年 (1906) 3 月 2 日
- 『酒田新聞』 明治 41 年 (1908) 7 月 16 日
- 『酒田新聞』 大正 8 年 (1919) 5 月 20 日
- 酒田市史編さん委員会編 (1995), 『酒田市史』, 改訂版, 下巻, 酒田市
- 酒田市史編纂委員会編 (1978), 『目で見る酒田市史』 酒田市
- 佐藤三郎 (1974), 『酒田の今昔』 東北出版企画
- 佐藤三郎編 (1982), 『写真集 明治・大正・昭和 酒田』 (ふるさとの思い出, 246), 国書刊行会
- 佐藤三郎 (1984), 『酒田の歴史』 東洋書院
- 佐藤良次 (1905), 『荘内案内記』 酒田新聞社 (明治 38 年)
- (1915), 『荘内案内記』 酒田新聞社 (大正 4 年)
- 島岡宗次郎編 (桑田正三郎著) (1998), 『月乃鏡: 全国写真師列伝』 復刻版, (大正 5 年刊 (1916))  
筑紫紙魚の会
- 庄内人名辞典刊行会編 (1986), 『新編庄内人名辞典』 庄内人名辞典刊行会
- 高田可恒 (1909), 『山形縣庄内實業家傳』 実業之荘内社 (明治 42 年)
- 東京都写真美術館監修 (2005), 『日本の写真家: 近代写真史を彩った人と伝記・作品集目録』 日外アソシエーツ
- 東京都写真美術館編 (2007), 『夜明けまえ 知られざる日本写真開拓史—1. 関東編— 研究報告』 東京都写真美術館
- 東京都写真美術館編 (2013), 『夜明けまえ—知られざる日本写真開拓史—北海道・東北編— 研究報告書』 東京都写真美術館
- 鳥原学 (2013), 『日本写真史: 幕末維新から高度成長期まで』 (上), 中央公論新社 (中公新書 2247)
- 鶴岡市 (1975), 『鶴岡市史』 (下巻), 鶴岡市
- 鶴岡市史編纂会編 (2011), 『図説鶴岡のあゆみ』 鶴岡市
- 鶴岡市史編さん会編 (2016), 『新編庄内史年表: 旧石器時代—2014 年 (平成 26)』 鶴岡市
- 鶴岡商工会議所 (1909), 『鶴岡商工人名録』 明治 42 年, 鶴岡商工会議所
- 鶴岡商工会議所 (1931), 『鶴岡商工人名録』 昭和 6 年, 鶴岡商工会議所
- 鶴岡商工会議所 (1936), 『鶴岡商工人名録』 昭和 11 年, 鶴岡商工会議所
- Tucker Anne, Iizawa Kōtarō, and Kinoshita Naoyuki (2003), *The History of Japanese Photography*, New Haven, CT, London Yale University Press in Association with the Museum of Fine Arts, Houston
- 『山形新聞』 (1961-06-25), 「加藤正寛」 (生きている遺産 5).
- 横田洋一監修 (1989), 『明治の横浜・東京: 残されていたガラス乾板から写真集』 写真集『明治の横浜・東京』を刊行する会
- 古田亮 (2012), 『高橋由一: 日本洋画の父』 中央公論新社 (中公新書 2161)

*Summary*

Early photography studios in the Meiji era  
– Images from Tsuruoka and Sakata  
in the Shonai region, Yamagata prefecture

Marie Gaboriaud

This article aims to trace the history of the first photography studios, at the end of the 19th century, in two towns of the Shonai region, in the Yamagata prefecture of Japan – the castle town of Tsuruoka, and the port town of Sakata.

The first local photographers are, for the most part, anonymous, but they played a very important role in the dissemination of photography. Images of theirs enable us to explore this region of north-east Japan more than a century ago, showing its urban landscape, its modernization, the disaster of the Shonai earthquake of 1894, and its people – those who attended the studios and posed for photographs. Together, the photographers and their subjects contributed to the creation of this valuable documentary record of their time.

(本研究のために平成 27 年度慶應義塾大学学事振興資金の補助を受けたことに心より感謝いたします。)